



Title	「織る」虫・「怨む」虫：平安朝漢詩における 「蚕」語群の詠法
Author(s)	小山, 愛桂
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 9-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102711">https://doi.org/10.18910/102711</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「織る」虫・「怨む」虫

## —平安朝漢詩における「蚕」語群の詠法—

日本文学・日本語史学 博士前期課程1年

小山 愛桂

### はじめに

中国文学の一ジャンルである漢詩は、古代以来日本に受容され、日本人による詩作も行われてきた。日本人が作成した漢詩は、中国文学と日本文学、ならびに和文学と漢文学の間に位置し、異なる言語文化の接触の様相を映している。日本、特に平安朝にかけての古代の漢詩の詠法は基本的に中国からの影響という視点で説明されるが、中国の表現をそのまま踏襲したとはいえない例もみえる。本発表では、一例として「蚕」語群（以下で説明）を取りあげ、日中および日本の漢詩と和歌という二軸で比較検討を行う。

本稿で「「蚕」語群」として指すのは、蚕（蚕）・蟋蟀・促織・絡緯という語だ。これらは中国では同物異名とされ、日本の古辞書では別々に立項されたものの漢詩中では交換可能な類義語として扱われる。「蚕」語群の詠法として、①鳴き声の特徴から「機織り」とともに詠まれること、②物悲しい声が詠まれることが知られている。特に①は、『芸文類聚』所引『詩義疏』や『文選』卷十九「古詩十九首」に対する李善注所引『春秋考異郵』および宋均注といった中国漢文の記述に依拠し、中国漢詩から日本漢詩、さらに和歌に摂取されたといわれる。確かに、日本漢詩における「蚕」語群の詠法、および和歌における対応する和語（「きりぎりす」「はたおり」等）の詠法は中国漢詩文の影響下にある。しかし、①②の詠法のなかでも日中・和歌と漢詩では異なる表現傾向がみられる。この点で、「蚕」語群は中国と日本、和と漢の接触を考える好例といえる。

### 目的

本発表の目的は、平安朝漢詩における「蚕」語群の詠法を中国漢詩と比較し、受容上の特徴を明らかにすることと、対応する和語の和歌における詠法と比較し、共通と相違の様相を明らかにすることの二点である。

そのために、詠法①②を中国漢詩文と比較し、みえた特徴を和歌と照らし合わせる。

### 一、「織る」との組合せ

「蚕」語群が「織」と組み合わせられるのは、次のような中国の記述による。

明月皓夜光 明月は皓く夜に光り

促織鳴東壁 促織は東壁に鳴く

〈春秋考異郵曰、立秋趣織鳴。宋均曰、趣織、蟋蟀也。立秋女功急、故趣之。礼記曰、季夏蟋蟀在壁。〉

〈春秋考異郵に曰く、立秋に趣織鳴く。宋均曰く、趣織は、蟋蟀なり。立秋に女功急ぐ、故に之を趣す。礼記に曰く、季夏にして蟋蟀壁に在り。〉

(「古詩十九首 其七」文選卷二十九・雜詩上 〈李善注〉)

『文選』「古詩十九首」の「促織」に対する李善注は、「促織」と「趣織」を同義とみなしたうえで、立秋の頃に鳴き機織りを促すことから付けられた呼称だと説明する。また、『藝文類聚』の「蟋蟀」の項には、

詩義疏曰、蟋蟀似蝗而小、正黑、目有光澤、如漆、有角翅、幽州人謂之趣織、督促之言也。里語趣織鳴、嬾婦驚。

詩義疏曰く、蟋蟀は蝗に似て小さく、正に黒く、目に光沢有ること、漆のごとく、角・翅有り、幽州の人之を趣織と謂ふ、督促の言なり。里語に趣織鳴きて、嬾婦驚くと。

(藝文類聚卷九十七・蟲豸部)

とあり、蟋蟀が趣織とも呼ばれ、その意は督促であり、「趣織が鳴いて怠け者の女がはつとする」という俗諺があることが記される。

このような発想を受け、中国漢詩文は一般に「虫が鳴き、女が織る」という文脈で人間を「織る」主体とする。例えば次のような表現がある。

秋蛩挾戸吟 秋の蛩は戸を挾みて吟じ

寒婦成夜織 寒婦は夜織ることを成す

(南朝宋 鮑照「擬古」玉台新詠卷四)

ここでは、蛩が戸の向こう側で鳴き、女性が夜に機を織るという情景が描かれている。

一方、平安朝漢詩で「織」と「蛩」語群を組み合わせた例五首のうち三首が「虫が織る」と虫を主体としていた。次に一例を挙げる。

山館雨時鳴自暗 山館に雨ふる時 鳴くこと自ら暗く

野亭風処織猶寒 野亭に風ふく処 織ること猶ほ寒し

(橘直幹「蛩声入夜催 〈以寒為韻〉」天徳三年八月十六日闌詩行事第六・右)

ここでは、「鳴く」の対として「織る」の語を用い、蛩が「織る」、つまり織機のような声で鳴いていることをいう。

和歌においては、類似の和語として「はたおり（はたおる虫）」と「つづりさせ」が詠まれる。前者は「機を織る虫」、後者は「綴り刺せ」と裁縫を促す声のことをいう。

『新編国歌大観』所収の平安期に成立した歌集で「つづりさせ」を含む歌は五首、「はたおり」「はたおる虫」を含む歌は二十七首（うち「機織り」の意味を利用していると判断できる歌は二十三首）（重複を除く）で、明らかに「はたおり（はたおる虫）」の方が多く詠まれている。このことから、「織る」主体という観点でみれば、平安朝漢詩と和歌は近い位置にあるといえる。

一方、和歌では、虫の名称がもつ「機織り」の意味を利用し、他の布関係の語と結びつけて織物に関するストーリーを展開する趣向がみられる。例えば、

屏風に 紀貫之  
秋くればはたおる虫のあるなへに唐錦にも見ゆるのべかな  
(拾遺集卷三・秋・180)

では、色づいた野辺を「唐錦」にたとえ、その錦を「はたおる虫」の作品に見立てる。これに対し、平安朝漢詩（前掲の橘直幹詩を参照）では「織」が「鳴」の対とされ、鳴き声の比喩として「機を織るような声で鳴く」と詠まれている。また、漢詩は字義が機織りに関係する「促織」「絡緯」だけでなく「蟋蟀」や「蚕」も「織る」と詠むのに対し、和歌が機織りと関連づけるのは「はたおり（はたおる虫）」のみで、「きりぎりす」が同様に詠まれる例は見当たらない。これらのことから、和歌が「はたおり」という名を重視し修辞に用いるのに対し、漢詩は名への意識が弱く、「織」はあくまで音の比喩であるという違いがみえる。

## 二、「怨」という心情との組合せ

悲しみの心情との組合せのなかでも、平安朝漢詩には「蚕」語群が露の寒さを「怨み」鳴くという趣向がみえる。例えば次のような例がある。

欲将虫泣断人腸	虫の泣くを將て人の腸を断たむと欲す
殊感秋深不免霜	殊に感ずらくは 秋深くして霜を免れざるを
今夜何因寒怨急	今夜 何に因りてか寒怨急なる
被多折菊草棲荒	多く菊を折られて 草棲荒れたり

(菅原道真「重陽夜感\_寒蚕\_、応制」菅家文草 371)

秋が深まり霜の寒さを「怨む」蚕が、今夜は重陽の行事のために菊をとられ住処が荒れてしまったためにいっそう激しく鳴いているという。

一方、中国漢詩で「蚕」語群が寒さを「怨む」という例はみられず、「怨」との組合せ

では虫の声が人の愁い（「怨」）をかきたてるという詠み方が一般的だ。例えば、

蛩鳴誰不怨

蛩鳴くとき誰か怨みざらむ

況是正離懷

況や是れ 正に離懷なるをや

（中唐 雍裕之「秋蛩」全唐詩卷四百七十一）

は、「蛩が鳴くとき誰が怨みを感じないだろうか、ましてやまさに別れに際して抱く情なのだ」という。蛩の鳴き声を聞くと人は悲しい気持ちになるものだが、今は別離の時であるから悲しみはいっそうまさるということで、この「怨」は人の心情を指す。

和歌では、

人のもとにまかれりける夜、きりぎりすのなきけるをききてよめる 藤原忠房  
蟋蟀いたくなきそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる

（古今集卷上・秋四・196）

のような「きりぎりす」と悲しい心情の組合せ、ならびに

やまがきの木

詠み人知らず

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななかむ風のさむさに

（古今集・物名・432）

のような風などの寒さと「きりぎりす」が「なく」ことの組合せはみられたが、「きりぎりす」の寒さに対する心情と「なく」という行動をいずれも明示する歌はみられなかった。この点で、平安朝漢詩にみられる「蛩」語群と「怨」の詠法とは一部重なりつつ完全に一致はしない。

### おわりに

平安朝漢詩における「蛩」語群の詠法は、「織る」「怨む」主体という点で、中国漢詩に一般的な詠法とは異なっている。その特徴は一部和歌と重なるものの、名への意識や心情を明示するか否かという点で異なる様相をみせる。以上の検討から、「蛩」語群を詠む平安朝漢詩は、単に中国漢詩をそのまま踏襲するのではなく、また和歌と完全に一致するわけでもない表現を展開していると結論づけられる。このことは、中国漢詩・日本漢詩・和歌の詠法が単線的な影響関係では説明できないことを示し、日本文学における漢詩、および漢文学における日本漢詩の位置を考える一助となりうる。